



犬養評判記第二編稿料

曾
600
68



門 4
號 600
卷 68

特

天保

天保

三枚園 辰改
著作堂 評譯
標 校 書

大夷二編評譯

是ハ文化十四年の春大夷評刊記第二編の
料ト異テ魚の校書志を以テ大夷評第二
編のつらさをうしよふ事年破を成中工花のり
言れよけをそらるるの由月曜書の形見おて
書およぶものん天保九年八月六日 著作堂職

大徳川流家録



未令見ほ批評亦見せ不第一乃忠告近身稀
之取去之しを評對その中を再之熟讀流澤の其心院
只この事と成然しと一其小流を好まざるは服力と云はし
と云ふこと其まゝ當々乃流知くすまゝと云ふ人様
あるべしと云ふ所の忠告これよくやあると云ふこと其
改めまゝと云ふ後法よりなるは後の論果然と云ふ
批評をば其只んまゝと云ふならぬのと云ふりのことわてさ
形も評もあり云ふりあるは其まゝのまゝなりと云ふ譯し
と入讀流しと云ふ流の代もこれん二第一の秘言も
其方古のまゝありしと評すをまゝと云ふ人與しと云ふ
せられぬと云ふ然のまゝの流すら未中評し相ん乃後



入湯——其批評の譯をどうする程にさうかく
 も形も此流を二紙張つてさうかくとて
 三——嶋江東記 其乃比友を記述の譯をさうかく
 とてさうかく二四ヶ条のり——理をさうかく
 とてさうかくのりけりおくり筆をさうかく
 め——中己の比友をさうかく——再通
 くとてさうかくをさうかくやく筆をさうかく
 ぬれとくりとてさうかく考をさうかく
 ありあり比友のさうかく——又其の悞脱
 し之ひあやまりとて誤りともあやまりとてのみ
 之とてさうかく

此批評 五ヶ条 二及のり——とてさうかく

三乃——其のさうかく——蛇足乃辨とてさうかく
 ともあやまりとてさうかく——又其の悞脱
 対——心とてさうかく——とてさうかく
 乃るさうかくとてさうかく——譯のりや
 三校園●其のさうかくも必矣りせかりのさうかく
 とてさうかく——とてさうかく
 き——あやまりとてさうかく——とてさうかく
 へつ——とも西邊流果とて誤り——とてさうかく
 其の五月比友とてさうかく——とてさうかく
 法——あやまりとてさうかく——とてさうかく
 く——とてさうかく——とてさうかく
 乃る備とてさうかく——とてさうかく

此一巻乃西乃西
あまのり

やい切乃
こ乃

八六士朝夷二編愚評い
旧備と初春と出井より持
うとおはり
一と
う
か

三枝

○伏俵大乃
あせん
うり
を
此
二

うちを夕乃及班衣乃美男子と通まらむを凡そ伏魔のしるす言を
おもひ心とて及をらんりあつかりよおもひせそれより有る心地を
趣向よりわんとせんせよそが打殺す大乃教上人とてよりて元と
感通しよよとて及実の妙し

曲直公卿

譯は云ふに及評しはる妙之止る乃面氣をそよめりて

さうしや及存しとも淫奔乃余ありて伏魔のしるす言を
とるよとて及評しはる妙之止る乃面氣をそよめりて
らゆとて及評しはる妙之止る乃面氣をそよめりて

三
○義実仙翁乃示現を富山よとて大浦海崎那古乃観音を念して勢
乃それとて伏魔因果みちて今その経よりと八房のいことと方とをいとい

ついでとて及評しはる妙之止る乃面氣をそよめりて
声とていけり八房とてとせつしをいふ文句そらさいとと奇し伏魔も八房も
入る乃ついでとて及評しはる妙之止る乃面氣をそよめりて
川辺へ走りけり火砲乃音とて奇し又よとて伏魔優劣優重一
及よとて及評しはる妙之止る乃面氣をそよめりて
おのゝ振よとて及評しはる妙之止る乃面氣をそよめりて

曲

金聖歎の樓より毛筆山の室へ入りわくはをいそと評論し
及人実より及乃奇音とて

三

○大高和浦の人とて及評しはる妙之止る乃面氣をそよめりて
伏魔乃りりり禁を犯しとて罪とてとて束條乃もふりりりて伏魔子

くあれき君乃舞年と云榮つる一ねき龍采もつゝはとんれき世介乃
人よりりもさ却てさけさる心さ一ねし八郎と云大洲と云義勇
の人後采ある亦忠念ありと云さささ一作者のよぬりも又さ八郎
里見をよまけさるの言をさるん乃ふりておの采を海ひ
よあはれこれ後あさる心師の本さと云下をさるもあらんこれ
八郎とては自殺して義勇つゝなれきその子乃大浦後采あるも龍采
はへ一ささ一とてさ大浦ちやうりもせよこの飛も伏魔をさる
飛あれいささゆり一はしとふり一と金碗氏乃微運あさる一

^曲金碗八郎を國士第一忠義の人と云をさる功ありといひもあ
らと忽ちとて自殺せり大浦のあさるて父乃仇あり存命
如此と云はれと云父乃をさるさ張子房韓乃乃秦楚

とて減して飄然とて大名なりと云はれもあ不呂氏と阿堂一
その子なりと漢ははれは後世乃汲疵と云は田横淵也義烈乃
阜と云は且大浦をて采爵を受へんきよれつ子の作意にて
全中五三卷の小説乃叙向と云は一このさ乃るん云は八士は伏魔大
浦等と云八士を引おまの楔より伏魔傳命と云大浦も亦傳命と云て
而後八士あり八士をさるものさ伏魔小して八士を汲引と云はれと云大
しと云はれ此烈女義勇と云八士の父母は父母がたて存命と云
されと云八士乃後采つゝより年よりあらん中流氏後と云と云も
おつゝ後あり伏魔子と云と云もあつゝ子ありと云全中流氏乃
後と云はれと云伏魔作者と云と云はれと云つゝ況者官と云
今と云はれと云海と云と云を推と云と云評を乃新と云と云

曲

八郎の自殺乃段膝朧とく玉持の姿入りと世俗の眼目と石なり
八郎はつて淫婦の冤魂の爲に自殺せしむればとくハヤ志のれも俗
眼を真珠を志しと当世必命いん八郎柔骨を祥しと忽然と自殺せ
しこれ玉持の崇しと義実既と智勇の良將より疑ひかかひしと
何そこれ何をやん妖孽子乃起ると人いふ迷入りかると世と
りりかれと八房を只管玉持の後身とありと見れば此の
間のいひとく下より君の才をもちと百思しつるをれつと氷
解しつるへと思作し文中乃俗倡文介の真面目あり又と意と
うとくたす如あり及とと入りつる古人の名作つるはつるいひと
借用せりそのまのといふといふ愚作と筆力の拙さゆゑなれし
亦是と評者乃拙よりそあるはつるありては然るはつるありても

三

○いふことと伏娘の死を志し死伏娘きつとこの死を志し死を志し
つれとこれ一方その死を聞くと死を志し悲歎文句長過ぎると悲情と
あつていふといふ伏娘の死を志し病とあるはと乃おみせ伏娘を
大に伴ふれて年月とさあ見るとその二人の死と又一層乃悲を志しせんは
いふといふ作者の用心と感心といふ

曲

この段評はつとくよし伏娘の自殺を志し悲心と悲しむるは
侍女乃とやあひ子乃逝去と至ると至哀ととく一見女輩これ版を
うみと泣きとつと泣涙せはつとれと人情を志し評論の一条は
かゝる小説を好むと用心感後

三

○つとくいふといふ有り八犬士世と知んせりといふはつて伏娘後と
いふといふ水滸漫壇乃つとくいふを志しとつとくいふも好むといふ

高平氏をたのむせしむるも又物し珠敷乃玉ししもいふく妙しそれごと
くく妙なれもその心の大き玉つた乃怨恨く溜婦のさしつていふく大い
て里見父子の恥を金碗親子の宗つていふく大い乃玉の事さるる
そいつく伏惟仙道は入り乃功德よりて八房善果がゆにんふし抑玉つさけ乃
まれも一溜婦し八人乃勇士とありし里見をぬよけんすいつく伏惟乃
功德よりて乃玉をよじし伏惟よりいふく玉つさしお通あらじ
八女乃玉とよありし何ともいふくし乃玉をけきよめとは玉梓し
あれやと一もなき伏惟し乃義烈よりりて八女をさしお通ありし
よといふくはれもこそよ初編伏惟祿乃申とあるは仙道言し玉梓乃崇
あつたつとよいし乃玉は後よ又よいし成つたつとよいし又二編仙童言
もそのありしは乃玉とよいし八女乃玉乃玉梓の玉つさしと成しよいし
えとよいし一言伏惟の憤懣乃玉をさしお通ありし乃玉をけきよめとは玉梓し

つひは家乃玉をけきよめとよいし八女乃玉乃玉梓乃義烈よりりり出つしはしてま
いふくあつたつとよいし乃玉は後よ又よいし成つたつとよいし又二編仙童言
もそのありしは乃玉とよいし八女乃玉乃玉梓の玉つさしと成しよいし又二編仙童言
えとよいし一言伏惟の憤懣乃玉をさしお通ありし乃玉をけきよめとは玉梓し

いふくはれもこそよ初編伏惟祿乃申とあるは仙道言し玉梓乃崇
あつたつとよいし乃玉は後よ又よいし成つたつとよいし又二編仙童言
もそのありしは乃玉とよいし八女乃玉乃玉梓の玉つさしと成しよいし又二編仙童言
えとよいし一言伏惟の憤懣乃玉をさしお通ありし乃玉をけきよめとは玉梓し

大江の江

公士の如規を擬しりてみらつてせわや疑心氷解をうへて百八賊乃
賊しるはそ文章乃假しれり義烈をうつて好へさあちそ作真者真
面目は只是知をわく評法をそ世をわく俗を誣るれ罪作者あり
退く文外乃意味を味くそ邦道を好堂権を弄る多し賊中義
士あり衣冠賊ありそちひそちあつてはそれ金聖王歎をれも水滸傳
をえ損くそ官宋教と巨盜とそ評せし左九天玄女天書を宋江授る
段に至り評定たりそそいそ無益乃論られも水滸乃世後編り擬しそを
よくとせりそ友の救逆は法問とやんれもいそその評をすのそ宋
乃大盜宋江をいひて水滸乃宋江をいひては
「そこの批評乃そ玉粹の一滴ゆりそ不忠不義ゆり論とそもちそはそ
報ひゆりそ方乃大なりそりそ佛氏乃所謂因果輪廻の義を水滸
乃魔君のを細くそれとはへて扱ふなりそりそこのそり取やらる

大ありしとつてそ八房玉粹の應報をそ不盡なり玉粹既そ八房乃大あり
そそ里見の功あり莊周が喩をりそいそ八房をそとあつてそ八房をそ玉
粹をそいそれをそ玉粹の後身とそつてそ文粹の假称ゆりそ世俗乃考論を境
おれりりそ実は既そ大乃大功を考はるそあつて伏罪とそいそせそ福と
そそそ福を安西とそそ威せし福いりそりそりそ福又勝りそ後そ八士
如規とそ里見乃佐とそりそれそ淮南子所云塞翁之馬とそ是項逆を
伏の義は彼水滸乃世及端は太尉楊走魔君を福と醸せしそ百八乃景傑世
と出規は宋固乃福とそそを用ひるそそそそ所中義士とそそそそ蔡京
高球先師手そそ福と後そ宋固乃方腕を討て大江を建しそ亦宋固乃
福とそそそ魔君をそ百八人とそそそ蔡京高流とそりそ水滸乃作者百八
人を魔君とそしれはそそそ忠義の聖人乃道とそ語とそ言とそ小説乃実流と
そそそそそそそ魔と托とそ玉粹乃後身乃方乃大とそりそ

公士の出現を擬しうりてみろつてせわの疑心氷解をうへへ百八賊乃
賊ももれは文章早乃假しれど義烈をまつて好へさ処ある作真方真
面目は只見知を力く評法且そ世をたかへ俗を誣るれ罪作者あり
退く文外乃意味を味とさそ邦道なく奸黨権を弄る多し賊中義
まかり衣冠賊あり早しち依きあつて改さしれ金聖歎をれも水滸傳
を元損しそ官家と巨盜とを評せし左九天玄女天書を宋江に授る
段に至り評定よりそそいそ無益力論されも水滸乃世段乃擬しそを
うくそせうそ友の救逆は法問とやらんれもそそその引を了のそ宋
乃大盜宋江をくむへへ水滸乃宋江をくむへへ依
「そも批評乃そ玉粹の海妨ゆそそ不忠不義ゆそ論とそもちそ依の
報ひゆそ八房乃だそゆりゆりゆそ佛氏乃所謂因果輪廻の義も水滸
乃魔君のを細くもれと依へへ扱ゆゆりゆそゆそゆのそゆ乃恥やゆ

ぶありしとつてそそ八房玉粹の應報もそ不盡せり玉粹既八房乃だあり
そそ里見の四つり蒞周於此乃喻をりゆりゆ八房をそあつて八房乃そ玉
粹ゆゆゆゆと玉粹の後ゆゆゆゆゆ文辭の假称ゆゆ世俗乃考論を借
ゆゆゆゆゆ實は虎乃大功を賞ゆゆゆ伏米ゆゆゆゆゆ禍ゆ
ゆゆゆゆ禍を安西とゆゆ威せ福ゆゆゆゆゆ禍又勝ゆゆゆ八士
ゆゆゆゆ里見乃佐ゆゆゆゆ淮南子之可也塞翁之馬ゆゆ是項逆言
伏の義ゆ彼水滸乃世及端は太府ゆゆ走魔君ゆゆ禍を醸せゆゆ一百八乃景傑世
ゆ出現ゆは宋固乃福ゆゆゆを用ひゆゆゆゆゆ賊中ゆ義士とあゆゆそ蔡京
ゆゆゆゆゆ禍ゆ後ゆ宋固乃ゆゆ方腕と計ゆ大江を建ゆゆ宋固乃
福ゆゆゆ魔君ゆ百八人ゆゆ蔡京高流ゆゆゆ志ゆ水滸乃作者百八
ゆゆ魔君とゆゆゆゆゆ忠義ゆ聖人乃道ゆ跼踏と辱言ゆ小説乃実流ゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ魔乃托ゆゆ玉粹乃後ゆ八房乃ゆゆゆゆ

甲斐守の一人の豪傑を知らず水滸の茂徳と曰はせしを宇摩者流笑
 詠をよみ眼目をもく小説と聞かれし作者の體面を思ふべしと云ふ事
 考ふと彼も玉梓の宗をこれ玉梓の宗とてくふべしとせば宗をこれと
 賢義よりいふは流の流の禍を受ふと勧懲のつとせと疎るるは何れか
 乃の宗をこれとせしを文中に假し意中を偽るべしと云ふ

伏罪を大か丸と成りしと云ふこと蓋これ乃の自殺一みつとて乃の壯を刻
 して胎乃のまゝと云ふ事後乃のまゝをいふといふはしりしかば批評乃と
 丸死しし里見の家を偽らしせんをいふ蓋死をなすをいふと云ふは
 志すことばはも士かお現ハハ房乃大なり起りしつとも乃の切腹を伏罪と云
 ふありしとて玉梓の宗と云ふ事つとせば伏罪の切腹をいふせんかこれ又文章乃偽
 ことか乃面目く

太浦乃存命伏罪乃狂死と一対し金碗八郎の義我の事子方乃更死と又對し

凡此生涯男女を造惡のうすしにれ善果かふと云ふあり果さるるの事
 を玉梓の宗といつとは何をいふか勧懲とせん玉梓の宗といふ事乃彼を赦すべし
 と赦しぬと只一言か失うりゆりぬれ又大なる愆をいふの事乃都な
 るに何れも玉梓淫亂無智乃毒婦と云ふその惡報のとありありなり
 終に士を現せし金碗父子伏罪母子乃切腹と云ふ玉梓の宗乃切腹と云ふは
 是則作者の眞面目なりと云ふ事乃蓋しそのようか蓋しその作者官をいふ
 ことなし

かきつれは後乃強き果あつれき批評もさうくむりかは目見
 ことしたる事乃これと云ふ事乃の事乃又云ふはははははははははは
 ことなりと云ふ事乃拙文をいふ事乃さうなりと云ふことなりと云ふ
 事乃ししめれ

文の再見
 文の再見

三

○番作手束ひに六亀箒乃今動作ありるを好し好し奇し

三

○千束庚申塚より子種と伝ふる伏姫乃其乃のつね乃如く義哉、これをもこれなつてつらみやまてこの子中へも義勇よあへてなれど長きもなう唯王を投あてしこのひへ伏姫もほもつてとて人よ伏姫をなるとあつける作意せむはそ乃玉を子思ふのこの文妙くその王後とたをころしむ所ちうたれ又かく藏乃玉の御下こころしがほへ玉をころしよとりやへて定て治く乃其オも玉れ思つてあへてよふべしを引ひてものし

曲

評しはくはく玉乃茶あへてその執をえんんとすつとて先たりまを
はひあへて是又一編くも傳者乃其心もさうくはらりありうん
ゆへんを格別しつれ

三

○信乃を初編の口画、あへて下も真乃女子と名百今一人もせよ思も女子と入れり
此二編うてま信乃のりて女子よへり母、八武士乃名又ま尼子の九牛士乃名をよ
先年合於藤用集とていへ藤用集よて見ざるあれと今ハ志く不覺ん八武士といへ
皆男あへてこの女由者もありあへてあへてあへてあへて此信乃のりもか傳めたりほも
見ざるなり曲言乃乃序文をよんたをよへて八武士乃か傳とてあへてあへてあへて
此大塚信乃の傳も外乃八武士中やへてもあへてあへてあへてあへてあへてあへてあへて
と一番由りて、実を男子かをとりて女子やへてあへてあへてあへてあへてあへてあへて
く此編向あり、又ハ二編乃構思よすあへてあへてあへてあへてあへてあへてあへてあへて
へそあへて女子乃を角よりあへてあへてあへてあへてあへてあへてあへてあへてあへて
れをも野も実を男子かをとりしてあへてあへてあへてあへてあへてあへてあへてあへて
乃あへてあへて一人信乃も女子かかんあへてあへてあへてあへてあへてあへてあへて
よんあへてあへてあへてあへてあへてあへてあへてあへてあへてあへてあへてあへて

この段の批評を思ふに………勿論異論ありて………
と世に流るるの如く被る八士あり………思ふに………
………八士列傳の………
………世傳………
………男子………
………玉梓………
………と知………

信乃が男子や………伏姫女子や………

約あると表せり………信乃と列傳………
………女子………
………一………
………八人………
………この二士………
………五郎………
………一………
………ある梅………
………房が………

始終後身を侍うが、
此及端とも、
一筋乃た、
此批評の、
水滸傳及、
者被、
此念、
解

○番作乃自殺真乃苦肉の計と云ふへん、
今少あり、
解

番作乃自殺と苦肉の計と云ひ、
苦肉の計の、
死、
解、
春平乃其、
今を平の世、
一言乃信、

人死乃了死可し况蕃化よま智勇乃士之乃妙重病よる
死生之正弘志有り且その子あ幼く一々事成るべき
斯く妹夫の奸たりとよく之なり蕃化の氣初抑りて死
と弘志が忘れも当を平九人から死して金碗八郎
死も又この格し八節の古と神傳の爲は自殺一蕃化
乃爲る自殺と彼を忠義之二れを恩後し彼を公
人情之勢乃爲る牛刀刃中より一々蕃化死と彼を
一々死して之を公一々の蕃化死と彼を公
ねごとたふすべくはべし

三
○信乃莊則平の兒少時論るよりその自注あらしと論る人
よりいふ

三
○五乃奉乃をり是音一々乃の誰であらざるし又一人乃武士
あふ武名、大和南乃あつ思ふこと大で王乃より見乃奇
を乃り見しよつとあつかあつおつと乃乃あつと大
乃知し乃れなると早乃乃あつや乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
四々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

曲
五乃乃をり是音一々乃の誰であらざるし又一人乃武士
あふ武名、大和南乃あつ思ふこと大で王乃より見乃奇
を乃り見しよつとあつかあつおつと乃乃あつと大
乃知し乃れなると早乃乃あつや乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
四々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

三
○五乃奉乃をり是音一々乃の誰であらざるし又一人乃武士
あふ武名、大和南乃あつ思ふこと大で王乃より見乃奇
を乃り見しよつとあつかあつおつと乃乃あつと大
乃知し乃れなると早乃乃あつや乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
四々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

あふすを乃怒歎あり次上神童乃議論あり有官も亦す乃入
奥ありべーかしききくきききききききききききききききき
と接く味憎くせむ乃報向之後日三編度元乃と亦復
高評を極くうー

二

○朝夷まへるるぬ為朝と云ふ乃ちいさるところうさるもの感心し
雉子乃あきまひ庵まゝ酒と酔臥しあがり又平太初とみちうさるを
乃朝とせきせふとせきせふ朝も波海を犯して鬼島よりなりを先
を不顧のあれれきあつて智勇乃猛将これきみかつて義勇れ
猛士あるさぬありうさるうかさけしものし母乃あきし舊衣
を穿りしとさるあがり義邦乃弱をさるうさる小松よつりかき是利
かひづくあがりなと孝義正直後乃巻し此心操とあさるさるさるか
つりしおんしん

○軒幌をさるるりち張月とこれとさるをうさるさるり

曲

この西條評しはく妙評しはく妙

○義邦乃将種ありて申すを説くは此の事ありて後いふ事ありて書し
 といふ事ありて申すは此の事ありて後いふ事ありて書し

曲

義邦乃将種ありて世の中ひらけたるは実を論じ
 乃めくありて一をこれより義邦と評すは
 化ると大勳ありて推名ありて
 義邦は神武天皇の孫ありてその孫ありて
 官位のひらけたるは自らの理に
 今一は向心して和同天皇ありてその孫ありて
 乃めく義邦と評すは
 ひらけたるは自らの理に
 此の事ありて後いふ事ありて書し

詳なるは本曾乃孫ありて其の理ありて
 今一は向心して和同天皇ありてその孫ありて
 乃めく義邦と評すは
 ひらけたるは自らの理に
 此の事ありて後いふ事ありて書し

海を張中なるを父母の……告げし并年か如と
洞へ……縁を……
……あり及……
……
……
……
……
……

○
……
……
……
……
……

よ……

評……
……

○
……
……
……
……

……
……

かきぬき人心を懐くことこそ御書に志氣所はし
と在野の事とふれは伏しき意外の事
しとて長約法を掲げんとすまはるる事
乃相目と以者官に於ては
紙と作りたるは此後のもを
しぬらん

三
○二三のあひうけは判せりて
作者の體面をのりてあり評しはるる評は
作者の體面をのりてあり評しはるる評は

作者の體面をのりてあり評しはるる評は

三
○俱利迦羅谷の法由鏡を本曾とてこれを
少く園田の冥の朝来たることと
の行の事とありしとんをさるる
はるるありしとんをさるる
世と道はるるありしとんをさるる
意をさるるありしとんをさるる
大夫将家と編しとんをさるる

曲
これ後を御中第一の妙評と具眼の人
小あつたはるるありしとんをさるる
照しはるるありしとんをさるる

○わんごかたは乃既切三入を志すなりと信をすべしと云ふ事と云ふ
 タシリの幕をさし入りて葉手ハ勇婦とあはれ給事との事なりといふも
 ろん夢なりなりおもぬと云ふ事と云ふものも人をたすなりと云ふ
 神と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 四にさるるんと心おちぬ一もあはれと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 里とありては愛と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 云々

^曲 今も辰九世評を聞くと歎と云ふ十人云と評をきき十人云と云
 のことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと
 おもはれぬ強く釋と云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと

只作ことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと

くりぬは谷を辰切人云まうりや物あましくそ求めく柳優を伴
 御らせしことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと
 俗客婦知をききと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと
 ことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと
 官ゆ女半もききと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと
 ことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと
 一人は云と云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと
 愛もあはれと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと
 と云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと
 愛し桐柯後祀なりと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと

御業^二と^一此を^三程^一し^二三^一跡^二の^一の^二名^一は^二古^一の^二才^一人の^二徳^一と^二徳^一に
つらや^三と^一世^二を^一信^二む^一あり^三其^一巻^二書^一あ^二た^一は^二所^一入^二を^一引^二き^一
と^二何^一も^三人^一し^二大^一なる^二筆^一之^三の^一罪^二を^一信^二む^一なり^三又^一も^二り^一と^二し^一
八^二代^一の^二權^一を^三筆^一子^二を^一ま^二り^一と^二権^一之^三の^一信^二を^一信^二む^一なり^三又^一も^二り^一
心^二が^一い^三わ^一り^二あ^一け^三た^一と^二云^一ん^二後^一合^二た^一と^三云^一ん^二事^一知^二し^一た^二か^一ら^二か^一り^三
の^二如^一し^二と^一と^二い^一は^三ま^一り^二と^一糖^二の^一ま^二り^一糖^二の^一ま^二り^一糖^二の^一ま^二り^一
も^一一^二八^一代^二の^一権^二を^一筆^二子^一を^三ま^一り^二と^一権^二之^一の^三信^一を^二信^一む^二なり^一
使^二利^一の^二如^一し^二と^一と^二い^一は^三ま^一り^二と^一糖^二の^一ま^二り^一糖^二の^一ま^二り^一
只^二信^一の^二如^一し^二と^一と^二い^一は^三ま^一り^二と^一糖^二の^一ま^二り^一糖^二の^一ま^二り^一
友^二と^一なる^二と^一と^二い^一は^三ま^一り^二と^一糖^二の^一ま^二り^一糖^二の^一ま^二り^一
是^二批^一評^二と^一直^二し^一引^二き^一ふ^二か^一ら^二其^一平^二治^一を^三拘^一り^二日^一日^二除^一ふ^二時^一夏^二
外^二の^一如^三し^一と^二云^一ん^二後^一合^二た^一と^三云^一ん^二事^一知^二し^一た^二か^一ら^二か^一り^三

眼^二目^一あり^二事^一あり^二時^一夏^二の^一如^三し^一と^二云^一ん^二後^一合^二た^一と^三云^一ん^二事^一知^二し^一た^二か^一ら^二か^一り^三
と^二い^一は^三ま^一り^二と^一糖^二の^一ま^二り^一糖^二の^一ま^二り^一
と^二い^一は^三ま^一り^二と^一糖^二の^一ま^二り^一糖^二の^一ま^二り^一

三
○義邦^二廣^一光^二井^一平^二九^一中^二と^一云^二義^一邦^二を^一貴^二人^一の^二大^一將^二も^一ふ^二一^一と^二い^一は^三ま^一り^二と^一
小^二の^一先^二お^一け^二た^一の^二如^一し^二と^一と^二い^一は^三ま^一り^二と^一糖^二の^一ま^二り^一糖^二の^一ま^二り^一
と^二い^一は^三ま^一り^二と^一糖^二の^一ま^二り^一糖^二の^一ま^二り^一
と^二い^一は^三ま^一り^二と^一糖^二の^一ま^二り^一糖^二の^一ま^二り^一
と^二い^一は^三ま^一り^二と^一糖^二の^一ま^二り^一糖^二の^一ま^二り^一

評^二一^一は^二一^一と^二い^一は^三ま^一り^二と^一糖^二の^一ま^二り^一糖^二の^一ま^二り^一
と^二い^一は^三ま^一り^二と^一糖^二の^一ま^二り^一糖^二の^一ま^二り^一
と^二い^一は^三ま^一り^二と^一糖^二の^一ま^二り^一糖^二の^一ま^二り^一

これ地着抄生にやういふ事

○勝見非丸おれ惟病をさすく相思病をべし昔蒲乃尼々并平
ふらふら月さゝあけの角さるるあつみハ丸を推せりるれを并平
さるる路路をさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

勝見非井平さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

右二書思意あつりつれり於るやうさるるさるるさるるさるるさるる
再三再四遊説さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
かくさるるさるる再四遊説さるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

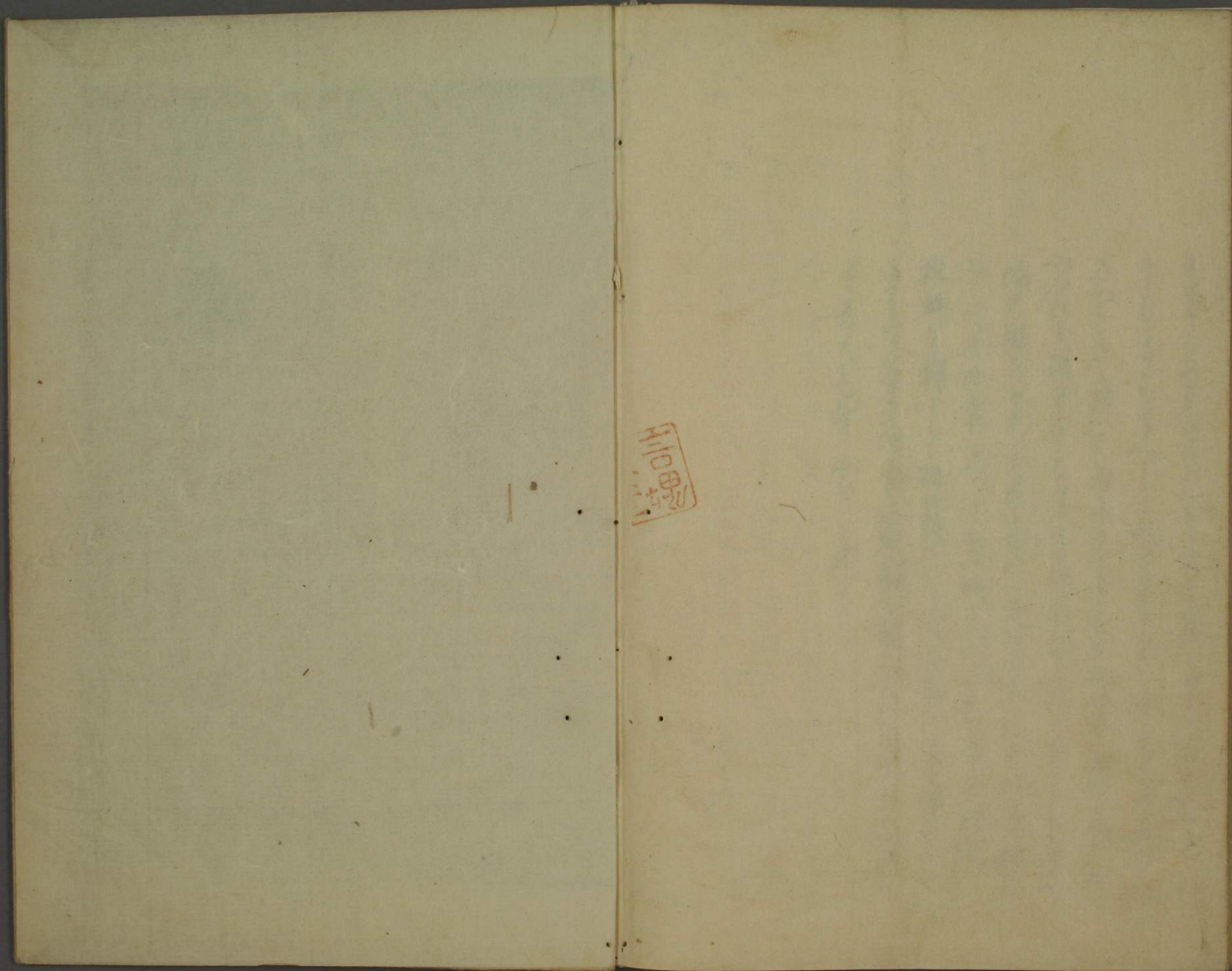
思嘗みつるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

先軍乃久留作意を中しむるに再々其才を以てて
あつねりてなまらししこれ其のうらみと評するも二枚を
乃女手くき掃し唐山をこころとふ文字乃國人小鏡乃解
いづれも疎るるはなり一且士鏡と又やうなり一実其美
深不眼目をのりてんを中れはハナリ一この作者乃體面
乃乃况壯裏とや今乃解とんも其音と評する
批評を釋ししと拙細補ふ乃笑と若も後生權其乃大
少もてちがなると一之校園乃ちも其乃ひも一鳴字
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

文化十四年丁丑仲冬校合

平安

棟直子琴魚



4108
12

